第18回八王子市まちづくり審議会

－会議録要旨－

平成２８年３月３０日
生涯学習センター 第２学習室

八王子市まちづくり審議会事務局

会 議 名	第18回八王子市まちづくり審議会
開催日時	平成28年３月30日（水曜日）午後７時～午後８時34分
開催場所	生涯学習センター　第２学習室
出席委員	野澤　康　　委員 山本　薫子　委員 田中　泰慶　委員 山本　通陽　委員 福田　邦人　委員 堀内　進一　委員 富樫　房司　委員 吉永　鴻一　委員 中村　文子　委員
欠席委員	中西　正彦　委員
市出席職員	まちなみ整備部長　　田中　正雄
その他	
事 務 局	まちなみ景観課長　　柳 まちなみ景観課主査　　立川 まちなみ景観課主査　　上原 まちなみ景観課主事　　髙塚 まちなみ景観課主事　　坂井
議　　題	１　開会 ２　議事等（報告事項） （１）協議会支援に関する要綱改正について （２）地区まちづくりフォーラムの報告について （３）中町の活動報告について （４）その他（小津・摺指地区の動きなど） ３　閉会

公開・非公開の別	公開
傍　聴　人	なし
配付資料	〔配付資料〕 次第 資料１　　八王子市地区まちづくり助成金交付要綱 資料２　　地区まちづくりフォーラムの報告について 資料３　　中町地区まちづくり協議会の活動状況について 参考資料 第 17 回八王子市まちづくり審議会会議録及び会議録要旨 八王子市まちづくりアドバイザー名簿（平成 28 年 3 月 31 日現在） 意見シート 資料１の追加資料 ハイキングマップ八王子

〔午後７時　開会〕

会）：会長発言
委）：委員発言
事）：事務局発言

（１）協議会支援に関する要綱改正について

事）前々回の審議会で、協議会への支援のあり方について諮問したが、協議会への支援の３年という期間では合意形成を図ることが困難であろうと考えられるため、より柔軟に支援が行われるよう、平成28年４月１日付で要綱を改正する。

中町地区まちづくり協議会への助成金の支援は、26年度で終了したが、今後新たな協議会への助成金の支援は、これまでの各年度50万円を上限として、３年間で計150万円から、平成28年４月１日以降は５年間で150万円を振り分けて使うことができるようにする。

助成金の交付額について、準備会の１年度20万円を上限というのは変更ない。ただし協議会については、１年度50万円を上限とし、かつ５年度で総額150万円を上限とする。そのため、２年度目以降に継続して助成金を交付する場合は、総額から前年度までにかかった経費を差し引いた額とし、かつ50万円を超えない範囲内の額とする。

１年延長の考え方には、準備会、協議会ともに変わりないので、協議会については、５年間プラス１年延長ということで、要綱を改正する。

変更した条項については、交付要綱の第３条第２項及び第３項、第１号様式になる。

委）　協議会への助成金制度は、最大６年間助成されるようだが、もうその先というのは、今のこの要綱では可能性がないのか。

事）　要綱のため、制度改正すればもう少し長くはできるが、財政面、また可能性として、市としては概ね５年あるいは６年の中で、協議会の活動を終結に向けてやってほしいという考えである。それに、助成制度がなくなったから、全く市で何もしないのかという話ではなく、まちづくりアドバイザーの同行などについては、別途予算を組んでいて、助言等を行うことは、助成期間の年数が過ぎても可能である。

会）　なかなか決めた年数でうまくいくかどうかはわかりませんが、エンドレスにできないという市の考えもわかるので、地域が自立していくというのが理想である。

地域としてもどこから軍資金を引っ張ってくることができるのか、５～６年で、市とのコミュニケーションの中から考えられるようにやっていくべきだと思う。

事）　中町地区まちづくり協議会では、まち歩きのパンフレットをつくっていて、ここにスポンサーを集めて、それを活動資金にしようというふうな活動の取り組みを始めている。

会）　まちづくりをやる軍資金としては、別に市からの助成金が唯一ではないのでということ

をもう少し認識してもらう必要はあると思う。

委）　前回の議論の中で、金銭的にはある程度けじめをつけなければいけないということはわかったが、金銭の助成だけでなくて、人的助成もできるのではないかという話が出ていたと思う。それはアドバイザーなり、市ができることは支援するというような話だったが、中町の場合は継続しているのか、その辺はそういう認識でいいのか。

事）　中町自体は助成金が終了しているが、今でも、市の職員にアドバイザーが同行して、協議会の定例会などでアドバイス等は行っている。

28年度の予算の中でも、中町へのアドバイザー同行という形で予算は認められているので、人的支援と、情報提供はしていきたいと考えている。

（２）地区まちづくりフォーラムの報告について

事）　３月５日、土曜日、こちらと同じ会場で、第８回地区まちづくりフォーラムを開催した。フォーラムの目的は、条例周知、活用促進、まちづくりアドバイザーと市民との交流、地区まちづくりフォーラムの提案を地域で活かすことで、19年度から開催している。

本年度のテーマは、「空き家を活用したまちづくりを考える」。まちづくりといっても、そのまちの背景には色々な課題があり、その要因の一つかもしれない空き家に焦点を当て、空き家を地域資源にできないか、それを考えるきっかけづくりとして、このテーマとした。

前半では、まちづくりアドバイザー保氏、三島氏、関谷氏に、中心市街地、市街化調整区域、住宅地における空き家を活用したまちづくりの提案を、後半では、実践的なワーク形式として、参加者が各グループに分かれ、ブレインストーミングを行った。

三島氏は、今年度にまちづくりアドバイザーとして登録した。

また、アドバイザーのサポートとして、小津町、摺指地区の方、以前、準備会として登録していた清川・太陽地域再生まちづくり準備会の方にも声をかけ、参加していただいた。

中町地区まちづくり協議会の方にも参加していただき、募集人員が30名のところ、実際は29名になったが、さまざまな意見をいただきながら、フォーラムが開催できた。

当日は、審議会委員のお二人にもご参加いただいた。

紙の資料が欲しいと問い合わせがあり、資料２に少し手を加えた形で作成したいと思う。

アンケートで出た意見については、今後、まちづくり活動をしていく団体に対して、情報提供や活用するなどしていきたい。また、アンケートの内容をよく精査して、次回のフォーラムに活かしたい。

委）　自分は、三島氏のグループに入ったけれども、広範な視点から語られていて、また、地域の力をうまく活かすというふうな視点に興味が持てた。グループメンバーは、男性が多かったが、実際にこれからまちづくりをやろうという裏高尾町の摺指地区の方や小津町の方が参加していて、そこに興味を引いた。

結論的に言えば、アンケートの一覧表の項目が、全部深掘りされたかというと、実際そうではなかったが、個々の人たちが抱えている現在の問題についての話を伺えたのが、一番リアルで良かった。

委）　自分もほぼ同じような印象を持っていて、まず参加した方々も、大学生でこういった問題に関心がある方から、実際に中心市街地で不動産業を営んでいて、ビジネスという意味で切実である方から、住宅地の中で、近くに空き家が増えてきて、漠然と不安を感じている方など、かなり温度差があったかと思う。中心市街地、市街化調整区域、住宅地とそれぞれテーマも課題も異なっている中での、何が問題なのか、ワークショップそのものは、かなり基本の部分を確認し合ったというように感じた。

だから、新しい情報がたくさん得られて、非常に刺激的だったという方から、もう少し自分のやっていることについて、ディスカッションを深めたかったという、ちょっと消化不良の方ももしかしたらいたのかもしれないという、その辺の幅があったと思う。

委）　シニアというのはもう地域で支えないとどうしようもないという介護の問題が出てくるが、フォーラムの中では、地域で支えるという言葉は出なかったのか。若い人たちはまだそこまで認識がないかもしれないが、いわゆる要支援クラスの人は、国からの支援がだんだん難しくなるわけで、そんなときに不安を持っていないのかという気がしたので、お聞きしたい。

事）　今回のまちづくりフォーラムは、空き家をどういうふうに有効活用するかというテーマで参加していただいているので、まちの中にご高齢の方がいて、その方をどうやって支えるかというテーマではなく、あくまで建物としての空き家をどういうふうに活用するかという話だったので、多分お話としてはあまり上がってこなかったように感じました。

委）　参加した感じでは、人口がじりじり減っていく話はありました。

委）　空き家を利用して、グループホームをつくろうという発想にはならなかったか。

委）　グループには若い人もいて、非常にユニークなアイデアが出ていたが、分科会としてまとまるというものではなかった。

委）　空き家をどういうふうに生かすかというのがメインのテーマということだが、例えば現実に、さっき出てきた少子高齢化問題に対してや、新たに空き家が出ることに対しての対応策とかその辺の議論というのはされたのか。

事）　今回のフォーラムは、その地域に１軒の空き家が出て、地域公共のために何か活用してくださいと想定したときに、どういう形での活用が考えられますかというテーマになっている。

委）　これからどんどん空き家が増えていく中で、自治体としては、それに対してどういうふうな対応をするかという意味での意見をお聞きしたい。

例えば市街化調整区域、特に小津なんてそうだと思うが、まさに典型的な少子高齢化の延長線上に空き家問題は出てきていると思う。それは放っておくとどんどん増える。そこを根本的に何か手を打たないといけないし、これは個別に空き家を潰していくというのではなく、そう

いう悪循環を断っていかないと、どんどんこの問題は引きずっていくのではないか。

事）　空き家対策については、住宅政策課で議論している。住宅マスタープランも改定をしたが、抑制というよりは利活用、要は、個人財産のため、そういう空き家についての方策、住居手当、住宅取得、要配慮者とかそういう言葉があるが、それは基本的に市場に任せる。ただ、それができない人に関しては、居住支援協議会を設立して、情報交換で、利活用していこうというのが今のところの空き家対策のメインになっている。

委）　空き家に住んでもらうためには交通アクセスの問題とか、それから、実際にそこで仕事をするとか、そういう意味でのトータル的な対策をとらないと実際、建物だけつくったとしても、そこに若い人が住むかといったら、それは現実的になかなか難しいと思う。リンクした形で何か対応していかないと、なかなか空き家というのは建物をつくったとしても、結局入る人はいないのではないか。

事）　今の指摘も、住宅マスタープランの改定の中で出てきた話題と重なる。住宅マスタープランの上に都市計画マスタープランがあって、住宅の中でどこまで公共交通なり、交通網のネットワークをどうするかという議論まではなかなか踏み込めないなかで、住宅に特化して、利活用という形の議論をしている。トータル的に、空き家だけで、その都市計画なり、都市計画マスタープランができているかというと、なかなかそういうものではできないので、空き家対策に関しては利活用を図っていこうというのが、八王子市の姿勢である。なかには新規住宅をつくるのはやめて、利活用に集中するような政策がとれないかとか、そういう意見もあったが、計画策定まではなかなか難しいような状況である。

委）　空き家問題は、まちの景観上も住民の安全上も、今後重要な課題になると思う。改築してサロンにするとか、その時、子どもや若者、シニアが多世代で改築してつながりあうとか、よそ者パワーも活用するとか、コミュニティづくりの基本にするとか、更に過疎地の場合は、交通、医療問題も同時に検討せねばならない。そこで、まずは、行政が取り組んでいる空き家問題を教えて欲しい。

事）　市としても、今の意見について検討しているのは正直なところだが、八王子として空き家対策のメインに置いているのは、今はもう潰れて、廃墟になって、周りに迷惑をかけている、そういう特定空き家対策に力を入れていきたいと考えている。

委）　行政に頼らず、住民が自主的に空き家対策を実行している地域があれば、具体的に教え欲しい。

事）　八王子の中では、例えば横山町、田町、清川町では空き店舗を地域の方に開放するような形で貸したりしている。

　行政ではなくて、地域の方々が一生懸命やっていることをまちなみ景観課ではこの地区まちづくり条例の中で応援したいので、このフォーラムをやっているが、実際にやっている人というのは、把握していない部分も含めればあると思う。

委）　八王子市の都市戦略レポートのようなものを見ても、今、56万人の人口が20～30年後には36万人ぐらいになるだろうという報告があった。このまま行けば、人口が減っていくというトレンドがあるとしたら、市の戦略としても、やっぱりそれを頭に入れたプランニングが必要ではないかと思っていて、例えば摺指地区なんかも何とか人を呼ぼうとしているのでしょうが、車がすれ違えないような山奥で新しいことを考えるとしたら、多分それを逆手にとって、地域資源として考えるという視点が大事なのではないかと、フォーラムで、そのような意味のことを発言したと思うので繰り返させていただく。

（３）中町まちづくり協議会の活動報告について

事）　毎月の定例会においては、まちづくりアドバイザーの宇野氏と、保氏に同行依頼をして、中町地区まちづくり協議会の活動に際し、助言等をいただいた。今年度については、まちづくり計画書の認定に向け、また助成金にかわる活動資金の確保に向けての取り組みを中心に活動を継続してきた。

お休み処の整備、まち歩きマップの制作、お休み処を利用しての甘味販売、まちの灯りのプロジェクト、石畳の清掃活動、２月には黒塀フェンスの塗りかえなどを実施してきた。

27年度中の中町の動きもあわせてご報告させていただくが、去年の12月に、中町を舞台にしたドラマが放映された。また、中町の一番通り、二番通り、三番通りの道路整備を行った。コンクリート道路に切込みをいれて石畳風に道路整備している。

もう一つ、第二次世界大戦後、旧ソ連占領下のドイツで伝染病患者の治療に力を尽くした肥沼信次氏という医師を知ってもらいたいという動きがある。現在の中町公園のところに、かつて肥沼医院があり、今後、市制100周年に合わせて、話題になる可能性があるかもしれないので、ご案内させていただく。

中町の場合は、助成金が26年度で終了しており、新たな活動資金として、東京都の都市づくり公社のまちづくり支援事業に申請して、50万円の交付決定を受けている。

28年度の活動については、まち歩きマップを制作しているが、その制作費として、お店の協賛金を募り、マップの印刷費や活動費に充てる予定ということで活動している。

また、秋に地域住民を対象とした、まち歩きとこれまでの中町地区まちづくり協議会の活動報告、それから、計画書（案）の説明会を予定している。今年度と同様に来年度もいろいろなプロジェクトを実施しながら、地域を巻き込み、計画書（案）に対して合意形成を図っていきたい。

委）　道路工事が行われているが、費用というのはどこから出ているのか。

事）　道路工事費を予算立てしていたので、それを使って工事した。

委）　中町のまちづくり協議会は、この地区の方々でやっていると思うが、例えば芸者さんやあるいは料亭さんとか、そういった人たちは一緒になってやっているのか。

事）　協議会自体の役員さんの中には、そういう方は入っていない。

委）　今、八王子の中でも黒塀や、あるいは芸者さんというのが一つのまちのポテンシャルということで、非常に期待をされている。市外からもかなりその辺、注目を集めていて、こういう協議会の人たちが民間レベルで頑張ろうとしている中に、当事者の芸者さんや料亭さんがある程度絡んで、しかも、これはお金の問題になると、やはりそういった方々も多少はお金を出すような方向に持っていかないと、やっている計画がなかなか成就しない。だから、その辺を、うまく絡められないのかと感じてしまう。

八王子の一つの魅力として、この中町地域に黒塀のエリアがしっかり、視覚的に見てもそういうまちなみがあって、しかも、芸者さんが着物で歩いていて、石畳でというような場所がしっかりでき上がれば、これはまちのポテンシャルになると思う。そうするために民間レベルでいろいろ活動されているけれども、それだけではなかなか進まない。お金もかかることですし、その辺が何か、みんなで知恵を絞って、うまくできないのかなと思う。

事）　行政として何ができるのか、あるいは地元として何ができるのか、あるいは行政と地元が協力して何ができるのかというのを考えていかなければいけないと思っている。

委）　ここはほんとうにいい場所にしたいと思っている。八王子で誇れるような一つの文化として、これを何とかしたいと思ったときに、やはり市は、この地区を計画に入れないとだめだと思う。

事）　いわゆる法令とか条例的な手法について、何を適用するのが一番いいのかについては議論する必要がある。地域ルールを自分たちでつくって、それに対して市がかかわってお手伝いをする、いわゆる地区まちづくり推進条例の適用が一番このまちにとってはいいことだとは考えている。

まだ地域で合意形成が得られていないので、少しずつ協力、賛同してくれる人を増やして、そういう動きが出てくれば、色々な人が追随してくれるのは一番いいと思う。ただ、それがなかなか難しいので、じっくり地域の方に声をかけながら、理解を深めていただくよう、まちなみ景観課ができる範囲で支援していきたいと思っている。

委）　もう少し何かいい形でＰＲができるといいと思う。一緒に歩いていても、気がつかない人もいる。以前にもそういう話をしたと思うが、もう少しいい意味でのＰＲというか、看板みたいな、ここはこういう通りがありますよというようなことをＰＲしたらいいと思う。放射線通りでもいいので、何かそういうものを設置したらどうか。そういうことも合意形成の一つにつながっていくのではないかという気がしますが、いかがか。

事）　協議会の方と話し合っている中で、無理やり合意形成をすると空中分解してしまうおそれがあるので、それは避けたいという意向がある。というのは、中町は、昔はお店が沢山あって、お店を中心に栄えたまちだったが、今はかなり空き家があり、いろんな立場の人に対して協議会の活動を理解してもらいたいということがある。色々なアピールの仕方もあると思うが、

協議会の人たちは無理に合意活動に持っていくことで、逆にこの活動が空中分解するのは避けたいというふうに考えている。

委）　かなりのところが地権者は別になっているという話が以前あった。今いる人たちをまず説得して、地権者にも理解をし、認識をしてもらうと、そういうプロセスを踏んでいかないと、なかなか合意形成ができないという話で、時間ばかりたっているような感じを受ける。その辺の活動が少しまだ弱いのかなという感じもする。

委）　そもそもこの中町のまちづくり協議会の活動をするに当たっては、ある一定以上の賛成があって、それで下から持ち上がってきて、この協議会があるという話だったが、その際に合意があったという話ではないのか。

事）　協議会そのものの組織化についての賛同は当然、一定の数字はいただいているけれども、最終目標は計画づくりをして、計画づくりについては条例上、３分の２以上の関係者の同意が必要である。

委）　協議会のメンバーというのは、その地元に住んでいる人や自治会の人だと思うが、地域の賛同を得て、これをスタートしたということではないのか。

事）　その計画づくりのための協議会づくりに対しては、あくまでも賛同者ということです。

委）　でも、実際、黒塀に塗ったり、そういうこともやっているわけですよね。

事）　ただ、それはあくまでもその了解を得た人のところの黒塀しか塗れません。計画書（案）そのものは承認されておらず、強制力を持っていないので、活動を理解していただいた方のところにしかできない。

委）　そうなると、その地区としての合意を得て、統一的にやっているわけではないのか。

事）　協議会が、一生懸命その計画書（案）に対して、３分の２以上の合意形成をとるために地道な活動をしている。

委）　極端に言えば、ところどころあいている所が出てきてしまうということになるわけか。

事）　このまちづくりの難しさというのは多分、総論として賛成な部分、積極的にやりましょうということと、実際の関係者としてそれに賛成するか、しないかというのは全く違う次元の話だと思う。それをどうやって、協議会の活動の中で理解してもらうかということの苦労があり、実際なかなか進まないということをちょっとご理解いただきたい。

委）　合意形成できていないというのは、どういうことで合意形成できていないか。

事）　住んでいる人、商売している人、アパートをつくって貸している人、あるいは空き地だけの人、いろんな人がいるので、やはりそこの土地なり、建物を持っている人の考え方というのは違うわけです。

委）　中町のこの黒塀のこのあたりは何か計画がしっかり、協議会の中ではできているのか。

事）　計画書（案）はある。

委）　計画書（案）はできているが、それに対しての合意形成ができていないということか。

事）　そういうふうに規制をされたくない考え方の方もいると思う。

委）　賛成する人もいるし、反対する人もいると思う。そういう時に大事なのは、10年後とか20年後、このまちをどういう形にしたいということをかなりレベルの高い設計屋さんも巻き込んで進めるべきだと思う。中町は、芸者さんがいて、八王子の宝だけじゃなくて、日本の宝ともいえる、特別な地域だと思う。だから、中町が歴史的にも、心を癒すという面でも価値のある場所にするためには、住民同士、行政内、行政と地域が合意形成しながら、進めていかないと、なかなか進まないと思う。

事）　例えば区画整理をしましょう、あるいは都市計画道路をつくりましょう、これは行政が主となってやるべきもので、当然、都市計画決定という手続などが出てくるが、今回の中町に関していけば、芸者さんや花街を活かしていくために、黒塀に塗りましょうというのは、皆さん方の財産を使って何か活用しましょうという話なので、やはりその関係者が同じ方向に向いてくれて初めて成立する話であって、それぞれの財産を持っている方が、違う考え方を持っている人をどうやって、一つの考え方に統一しようかという話になると難しいと思う。

やはり地元の中で、将来的なまちというのはあったほうがいいと皆さんが思って、関係者がお互いに理解していかないとまちづくりはできないと考えている。

委）　私は、計画を立てる段階から、市民と行政が協働してやっていくべきものだと思う。

事）　例えば道路の舗装でしたら、市がお金を出してできますが、人様の塀に黒く塗りましょうというのは、やはりその方たちの合意がなければできない。それをやろうとすると、地区まちづくり推進条例の中のまちづくり計画を承認、要するに、地元で合意形成して、審議会で承認して、市がオーケーしない限り、私有財産には手をつけられないということですので、この地区まちづくり推進条例というのがあるわけですから、そこの趣旨だけはご理解願いたい。

委）　初めて中町のことを聞いたときには、まちづくりとして意外な、そういうまちづくりを考えるのかという印象を持ったが、継続して見てきたら、ちょっとずつでも芽は育っているかなという、プラスの方向へ評価したいという気持ちがある。空中分解させたくないし、協議会が苦労されている話も聞きましたし、少しずつ、進んではいるのではないかという印象は持っている。

もう一つの救いは、学生がかかわっていること、これはすごく評価できることと思っていて、何とか継続できるようにさせたいと感じている。それで、確かに私有財産で難しいと思うが、やはりこれを、一つの日本の資産と考えれば、それを評価できるのは若者とかばか者とかよそ者の視点じゃないかということで、もう少し根気よくやっていったら、一歩前進、二歩前進できるのかなと思う。

委）　東京都の都市づくり公社の申請はだめだったのか。よかったのか。

事）　50万円、交付が決定している。

委）　もう一つお聞きしたいのは、似たようなところはないのか。古いまちなみをもう一遍興

そうといったときに、合意形成のプロセスなるものが、確かに私も見ていて歯がゆい思いをしているが、みんな利害が違うので、なかなか難しいと思う。先程言われた10年後のイメージをつくるというのも一つかもしれない。あのエリアを何か歴史、景観エリアと指定して、何か枠をはめるとか、もう少し違う手を打たないといけない。

委）　ただ、あまりにもあそこは狭い。

事）　狭いのと、例えば、30年前の姿をご存じの方はいいが、昔と同じように飲み屋がいっぱいあった時代だったら、また同じベクトルでやれたかもしれないが、あれだけ空き地があり、アパートがあり、いわゆるばらばらの中で同じベクトルでやろうとすると、やはりその利害が異なっている部分があるように感じる。

まちづくりで成功している事例というのは、まだ完全に壊れる前に何とか手を打ちましょうというところのほうがうまくいっているという感じがする。

委）　この前、高山に行ったら、やっぱり病院も何も全部同じ格好でやっているから、その気になれば何とかやってもらえるのかなと思うのだが。

会）　いや、それは次元が違い過ぎる。残っているもののあるなしと、ほとんど中町の場合は歴史的な建物は残っていないので、そこを歴史的なエリアにするというのは、それを持ち出すと多分、空中分解になる。地域の人が合意しないので、どうやってその匂いだけでも残すかとか、そういうことで苦労しているので、外から見て、あそこは芸者さんもいるから、歴史的なエリアにしてしまえというのは簡単だが、中にいる方たちはそう簡単にはいかないと思う。

委）　ということは、矢印をつけて、このあたりはどうだったというのもなかなかつけにくいわけか。私も中町に、こういう黒塀があると言っても、誰も知らない。だから、どこの人がここまで来るか、市内の人がほんとうに知っているのか、そのあたりから気になる。

委）　そんなに広くなくていいと思っていて、中町ぐらいのあの狭さでも十分だと思う。あの中で、誰もが安心して遊べる、車も来ないような、そういう場所づくりを、若い人や高校生などの層も加えて、チャレンジしてみてもいいのではないかと思う。例えば、八王子駅と京王八王子駅を地下でつなげる長期展望がなかったことは、まちの発展を大きく妨げているという市民もいる。まちづくりに関しては、2030年とか2050年とか、長いスパンで考えていく、そういう習慣をつけていかなければいけない。

委）　中町の協議会がもっと盛り上がって、地域の人たちの合意ももっと今よりも増えて、認知されるようなことになれば、市の地区計画に入って来る、そこまで協議会で頑張らなきゃいけないけれど、それがなかなかできていない。

委）　だから、そこを何か方法がないかなと思うわけです。この条例は、その地域をよくするために、皆さんちょっとまとまって考えて行動しましょう、そうしたらお金を出しますよという条例。それはいいけれども、多分今のままだと、こういった形でできた協議会はイベントをやるだけで終わってしまう。イベントをやって、何となくコミュニティがそこに広がって…と。

このまちをよくしたいと、みんなで言い始めたところで、大体それで終わってしまったりする、まちなみの整備だとかそこまでは絶対行かないと思う。そこに市が多少何か手を差し伸べて、じゃ、これをこう持っていけば、さっき私が言ったような市の全体の都市計画の中に入れましょうという話にいかないと、実際にはよくならないと思う。

委）　だから、トータルの計画の中でこの中町というのは一体どういう位置づけかによって、どこまでお金をかけてＰＲするかにかかってくると思う。例えばこの中町のまちづくり云々というのは、これは、市民にアンケートをとったときにどれだけ支持があるのかというのも疑問だと思う。

委）　こんなに重要なところだから、これだけお金かけましょうという、そこの説得性があまり、感じられないというのが私の意見です。

委）　でも、芸者さんに対する関心が非常に強いというのは、以前の会議のときも発言した。

委）　ただ、この程度の規模だとしたときに、それがほんとうに八王子市の芸者云々というのが、よくわかりません。例えばこれが京都とかもっと古いところの、そういうところのまちだと、確かにそこは観光になるかいうのはありますが。

委）　京都で実際に芸者さんが来たシーンでいろいろ話をしたことがあったが、京都で、京都出身の芸者さんはほとんどいないという話で、聞いたら、東京の多摩地区から来ているらしい。

委）　それを言ったら、一つのまちのシンボルとなっていて、あれはあれで、観光で成り立っている。

委）　ただ、多摩地区ではなかなか無理ではないかというのは、八王子の市民の人にアンケートといったときに、中町の位置づけというのはどこまで理解されているかというのは感じる。

事）　審議会で、皆さんの意見については参考にさせていただくが、この地区まちづくり条例の趣旨というのはやはり、地元の方が考えるまちのあり方だと考えている。そのまちのあり方について自分たちで考え、自分たちで計画をつくって、合意形成をして、それで正式な計画書（案）を承認されることによって、法的な制限をかけることができる。やはり、まちづくりの原点のことをやろうとしているので、その辺の活動や、あるいは地元の方針というのをご理解いただきたいという思いはある。

委）　広報について質問したい。例えば、このまちづくり通信の15号にある、お休み処など、こういう活動をほかの地域や町会などに横展開すると、とても役に立つのではないかと思うが、どういう方法で横展開しているのか。

事）　具体的な活動をしている組織体がどこにあってどういう活動をしているのかについては、私どもでも把握できておりません。

会）　横に展開させるというのは大切なこと、できればそういうことも考えていければいいと思う。

（４）その他（小津町と摺指地区の動き）

事）　裏高尾町の摺指地区は52世帯の、約150人が暮らす集落、南側に小仏川、北側に中央本線と中央自動車道が走っている。高尾駅までは歩いて、大体40分ぐらい、バスで15分ぐらいという便利な所にある。摺指のお豆腐、国際マス釣り場、３月は梅郷で多くのハイカーで賑わう。

今年度は、土地利用計画課に同行して、今後の進め方について有志のメンバーと話をしてきた。昨年の10月に町民の意見交換が行われた際は、参加された人数が少なかったので、この人数だけでまちづくりの方向性について決めてよいものかどうかと慎重な意見が多かったため、今年に入り、再度、町民の方だけで意見交換を行った。それにより、地区内でのまちづくりを進めていくことに、出席したメンバーから賛成の同意を得たようである。

既に地区まちづくり推進条例はご案内しているので、今後、まちづくりを進める手法の一つとして、地区まちづくり推進条例を活用するのであれば、アドバイザーの派遣や助成金交付などの支援を行っていきたいと考えている。

小津町は、81世帯の約250人が暮らす集落。集落に沿って、多摩川・浅川の源流である小津川が流れている。小津町に辺名という地域があるが、ここは昔、きだみのるという作家が住んでいたこともある。熊野神社では、お祭りの際、八王子市指定無形民俗文化財の獅子舞や太刀の演武を見ることができる。

小津町は、東大まちづくり大学院の演習で、東大まちづくり大学院生の現地見学が行われ、11月に地元住民を対象としたワークショップを行い、２月に２回目のワークショップを行った。

また土地利用計画課で、地域再生計画素案の策定と計画素案の実現に向け、平成28年では市のアクションプランに位置づけ、予算の確保や、平成29年から33年度において、空き家、空き山、空き畑の再生プロジェクトなどの各事業を実施する予定と聞いている。

また、土地利用計画課において、市街化調整区域内の沿道集落地区の活力向上に向け、新たな土地利用制度を活用したまちづくりによる地域活力の向上を図るため、住民の意向や地域特性を踏まえた地域住民主体のまちづくりを支援するということで、28年度予算に、専門家による講演や、まちおこし先進市の視察、ワークショップに係る経費について予算計上している。

こちらにつきましては、地区まちづくり準備会や協議会になる前の発意の段階で、地域に使えるということで聞いている。

以上、市街化調整区域内の地区を取り巻く動きを説明させていただいたが、この地区まちづくり推進条例をよりよい支援の方向につなげていきたいと考えている。

〔午後８時34分閉会〕